

令和元年5月26日現在

機関番号：14501

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2018

課題番号：26770100

研究課題名(和文) ヴィクトリア時代後期の英文学における中世主義の研究 ウィリアム・モリスを中心に

研究課題名(英文) A Study on Medievalism of William Morris and other later Victorians

研究代表者

清川 祥恵 (KIYOKAWA, Sachie)

神戸大学・国際文化学研究科・協力研究員

研究者番号：50709871

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：ウィリアム・モリスは、彼自身のデザイン、文学、社会主義活動といった多岐にわたる活動ゆえに、とすれば各分野で分断された評価を受けがちな人物であるが、これらすべての活動においてつらぬかれている思想としての「中世主義」の実態とその意義を、初期から晩年までの文学を分析することで明らかにした。とくに初期作品はラファエル前派主義などの大きな流れに埋没しがちであるが、モリスのアーサー王伝説や異教の物語の再話に見られる独自性と、後年の社会主義活動を経た後期ロマンスへの接続をたどることを主眼とした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ヴィクトリア時代の文化的影響力は、その大きさゆえに画一的にとらえられがちである。しかし、ヴィクトリア時代人たちの活動の大きな潮流のみならず、個々人の活動についてあらためてとらえ直すことで、当時の「中世主義」のような一種の復古趣味が、社会的・文化的に果たした役割を精緻に明らかにすることができた。21世紀においても、また英国のみならず少なくとも日本においても、想像上の「中世」という理想像を語ることは継続的に行われており、本課題は、ヴィクトリア時代研究としての学術的意義を有すると同時に、今日の社会における現在進行中の文化現象の解明にたいしても寄与するものとなった。

研究成果の概要(英文)：I have clarified William Morris's distinctive feature as a medievalist among other Victorians, based on the descriptions about medieval-like world and values appeared in his romances. Morris's various activities range from design to social activities; accordingly, up to the present date, Morris himself has been evaluated separately in each area. However, it can be found that his certain integrated thought lies in his literary works during his whole life, and through reconsidering and comparing them to other Victorians' thought and practice, I have brought out that Morris's socialism and paganism was supported by his pursuit of true belief.

研究分野：英文学

キーワード：ウィリアム・モリス 英文学 中世主義 北方神話 社会思想 ヴィクトリアニズム

様式 C-19、F-19-1、Z-19、CK-19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

文学作品にあらわれた中世主義については、2007年に古・中英語文学の研究者である Michael Alexander が、社会・政治・宗教・建築・芸術のすべての領域に通奏する思想としての中世主義を取りあつた研究書 *Medievalism: The Middle Ages in Modern England* を著した。しかしながら、「キリスト教中世」ひいては「カトリック中世」を基盤として構築された中世主義が議論の中心となっており、個々の作家の歴史観・社会観ひいては教会観について詳らかにされているとは言いがたかった。中世主義の出発点には伝統的な(教区を単位とする)コミュニティの解体への反発があつたため、熱心なカトリック信徒や福音主義者たちがキリスト教信仰を中心に据えた理論展開を行なつたのは当然だが、一様に中世の大聖堂を賞賛したカトリック建築家のピュージン、ラスキン、モリスを見るだけでも、その「中世」観はまったく異なっており、より多様な視角からの十全な検討が必要であつた。

2. 研究の目的

モリスの中世主義については、早くも1939年にC. S. Lewis が「本物の (real) 中世への関心——つまり、キリスト教神秘主義 (Christian mysticism)、スコラ哲学 (Aristotelian philosophy)、宮廷愛 (Courtly Love)」 (*Rehabilitations* [Oxford: Oxford UP] 42) に基づいたものではないという点で独自性を有していることを指摘した。この点に関して Ruth Kinna は、モリスがオックスフォード時代にラスキン、チャールズ・キングズリー、ジョン・ヘンリ・ニューマンの思想の共通点を指摘し、モリスの近代批判の源泉を明らかにするのに重要な視座を提供している (*William Morris: The Art of Socialism* [Cardiff: U of Wales P, 2000] 36)。つまり、モリス自身は、大学時代は「ハイ・チャーチ主義やピュージー主義の一派の影響をこうむっていた」が「一種の啓示とも言えるジョン・ラスキンの書物によって正され」 (Philip Henderson, ed., *The Letters of William Morris to His Family and Friends*, London: Longmans, 1950] 185) たのであり、モリスはむしろニューマンやキングズリーの「共有の遺産」である「反ピューリタニズムもしくは反プロテスタンティズムを繰り返した」のだという指摘である。対して社会主義研究者の Mark Bevir は、モリスの「生活の芸術化」という理想は、かえってピューリタニズムに接近しているという分析を行なっている (*The Making of British Socialism* [Princeton: Princeton UP, 2011] 88-89)。モリスが社会主義者へと後年「転向」したという事実から遡れば、モリスは若き日のアングロ・カトリシズムを完全に棄て、ピューリタニズム的アプローチに行き着いたと推測することは可能である。しかし、体制派すなわち「イングランド教会」 (Church of England) の信仰を保持することなく社会主義者となったモリスが、自らの文学作品において生涯一貫して儀式主義の教会を描いている事実は、Bevir の主張とは矛盾する。むしろ社会主義者としてのモリスを、単純に「中世主義の脱カトリック化」に寄与した人物としてでなく、あくまでも、ヴィクトリア時代という信仰の炎が燃え上がった時代において、伝統的な教会 (共同体) を厳しい目で見つめた人物として位置づけなおすことで、以後の中世主義の展開をより明確にできると考えた。

申請者は博士論文において、モリスの後期ロマンスを中心にその中世主義の実態解明を試みたが、とくに青年期・中期のモリスの作品について、以上の通り、モリスがキングズリーから受けたという「社会・思想的」 (socio-political) 影響の問題が新たに課題として見いだされていた。また伝統的共同体に対置されるモリスの理想の共同体像に影響を及ぼした、アイスランド趣味の問題も、それに関連して十分に検討する必要がある。後者については2006年には Marcus Waithe の *William Morris's Utopia of Strangers: Victorian Medievalism and the Ideal of*

Hospitality (Cambridge: D. S. Brewer, 2006) が、中期のアイスランド体験を契機にモリスが自らの中世観をどのように変化させたかを論じており、申請時に注目が高まったテーマであった。

3. 研究の方法

本研究では、モリスの文学作品にみられる中世主義思想を、ヴィクトリア時代の他の中世主義者たちの著作と関連づけて論じ、ラスキンによって一般化された「中世」の概念が、モリスによってある面では「世俗化」されつつ、どのように20世紀以降の文学者たちへと継承されることになるのかの一端を明らかにすることをめざした。モリス以降、中世主義は再びキリスト教中世への回帰を強める。しかし、果たしてモリスは「異色」の中世主義者として位置づけられるべきであるのかという点には、議論の余地が存在した。そこで、モリス自身が「社会・思想的」影響を受けたと後年述懐している聖職者・思想家・作家であるチャールズ・キングズリーの影響を精査することで、ヴィクトリア時代の中世主義がめざした「社会」の姿を明らかにすること、とくにキングズリーの著作を用いて、モリスが受容した当時の英文学にあらわされた社会批評について、子細に検討することとした。これにより、英国のみならずヨーロッパ全体の問題でもある、世俗化する社会とキリスト教信仰の関係性を、より精確に把握することが可能になると考えた。

4. 研究成果

(1) 第一に、モリスの中世主義の具体的な内容を明らかにしようと試みた。「中世主義」は「近代批判」と表裏一体の表現として用いられがちであるが、モリスはピューズンとは異なり、単に反近代の価値観をすなわち理想として主張したのではなく、根源的な価値観を追求した結果として「中世」の復権を訴えた。すなわち、モリスの文学作品において、「世俗化された信仰」が再びキリスト教文学のなかに流れ込んでゆく過程——換言すれば、中世主義の「深化」の過程——を明らかにした。この点に関してはとくに、モリスの初期ロマンス『人知れぬ教会の物語』における教会描写に焦点を当てて分析し、成果を2015年の日本英文学会関西支部大会で公表(学会発表①)したのち、その一部をもとにして2018年の国際比較神話学会大会でもヴィクトリア時代全体の「中世」観および「北方」観のなかにおける位置づけを再考した(学会発表④)。同作の時点でモリスの教会観は明らかに、当初から史実上の中世を理想化したことではないことが理解できるのだが、モリスの初期ロマンスは他の作家・画家たちと同様に「ラファエル前派主義」として皮相的に概括されがちであり、ラスキンとの差異——後年の思想との連続性は今後もひきつづき丁寧に検証してゆく必要がある。

(2) 同時に、ヴィクトリア時代にリアリズムを重視した小説が流行する中で、中世ロマンスの伝統を汲み、20世紀へとつなげた中世主義者たちの英文学史上の役割についても、付随的に明らかにした。とりわけ、今日ほとんど焦点を当てられることのないチャールズ・キングズリーの著作に着目し、モリス以前のキリスト教実践者かつ社会改革思想家の影響を再考した。とくに、キングズリーのデモクラシー概念は、モリスと同様に痛烈な近代批判に端を発するものであり、当時のドイツ神話学の発展を受け、両者ともに北方神話へと求知心を向けているという点では共通しているが、結果的にその方向性は大きく異なっている。キングズリーが、反ローマの精神から自民族の祖を対抗的なチュートン人に求めたのにたいし、モリスのデモクラシーは、自身のアイスランド体験における神話の普遍性／不変性の発見を鍵として、かつて存在した原初的共同体のような理想社会——生活に密着した原初的平等が達成されている社会——をふたたび獲得するために、アイスランドのデモクラシーを擁護しようとするものであった。したがって、キングズリーがアメリカの状況を「多数政治」なる衆愚政治と断じ、知的かつ霊的に洗練された指導者によ

る統治をめざす一方で、モリスがある種の無政府的平等を目指そうとするのは当然の帰結であり、同じ問題意識をはぐくみ、同じ神話学の影響を受け、関心を共有しながらも、両者の理想とする「中世」の姿は、それぞれの著作において全く異なっていることを明らかにした。(学会発表②、論文②、論文③)

(3) 以上(1)および(2)を踏まえ、ウィリアム・モリスの人物研究として、本人の異教徒(pagan)・社会主義者(socialist)という自称にもかかわらず、青年期に内面化された信仰がどのように文学作品に表されたかを検討することで、その思想をより徹視的に捉えることができた。英文学領域のみならず、思想史領域においても、当時のイングランドにおける社会と信仰の関係を明瞭にする一研究となった。また、研究を進めていく過程で、21世紀的な中世主義の状況との接続についても関連づけ、ヴィクトリアニズムの意義についても補足的に明らかにすることができた。図書①、論文①、発表③で明らかにしたように、モリスが描いた社会や信仰の理想は、彼自身の思想が過去の思想や物語を輻輳して織り上げられたものであるが、モリスを含む19世紀の思想が、21世紀の社会批判・社会改革の理想として、ふたたび繰りかえされている。「神話」の再創作は、ヴィクトリア時代において隆盛したムーブメントとして完結したわけではなく、社会批判の普遍的な一手段として、時代・地域を超えて反復されている。本研究の進展過程で得られたこの知見にもとづき、中世主義思想の英文学・社会思想・神話学における意義を、より精緻に検討するさらなる必要性が、今後の新たな課題として見いだされた。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計 3件)

- ① 清川祥恵「アーサー王の『転倒』——ヴィクトリア時代以降の『神話』の大衆化に関する一考察」、『国際文化学研究推進センター2015年度研究報告書』、国際文化学研究推進センター、査読なし、2016年3月、66-79頁。
- ② 清川祥恵「『人間が人間である権利』としてのデモクラシー——チャールズ・キングズリーの「古代文明」を読む」、『国際文化学研究推進センター2015年度研究報告書』、国際文化学研究推進センター、査読なし、2016年3月、142-155頁。
- ③ KIYOKAWA Sachie, “The Past Illuminated by the Grey Light: A Study on the Influence of Benjamin Thorpe’s *Northern Mythology* on William Morris,” 『神話研究』, 横道誠・南郷晃子・清川祥恵・植朗子(編), 査読なし, Sep. 2018, pp. 13-22.

[学会発表] (計 5件)

- ① 清川祥恵「ウィリアム・モリスと「石の聖書」——『人知れぬ教会の物語』の「歴史」概念を手がかりに」、日本英文学会関西支部第10回大会、日本英文学会関西支部、武庫川女子大学中央キャンパス(西宮市・日本)、2015年12月20日。
- ② 清川祥恵「ウィリアム・モリスの北方趣味とデモクラシー」、日本ヴィクトリア朝文化研究学会第16回全国大会、日本ヴィクトリア朝文化研究学会、筑波大学東京キャンパス文京校舎(東京都文京区・日本)、2016年11月26日。
- ③ KIYOKAWA Sachie, “Whose Lady is She? Representations of Guinevere and Other Arthurian Characters in Recent Films,” *Japan-Asia-Europe Comparative Symposium on Migration, Multiculturalization and Welfare in Naples 2017*, Conservatorio delle orfane a Terra murata, Procida (Naples, Italy), 21st Sep. 2017.
- ④ KIYOKAWA Sachie, “An influence of “Northern Mythology” on Victorian Britain,” Twelfth Annual International Conference on Comparative Mythology,

International Association for Comparative Mythology, Tohoku University (Sendai, Japan), 2nd Jun. 2018.

- ⑤ 清川祥恵、「ヴィクトリア時代の北欧神話」、学際シンポジウム「現代に生きつづける神話」、京都府立大学下鴨キャンパス稲盛記念会館（京都市・日本）、2018年7月28日。

〔図書〕(計 1件)

- ① 植朗子・南郷晃子・清川祥恵編著、ほか15名著、勉誠出版、『「神話」を近現代に問う』、2018年、256頁（「総論」4-14頁、および第三章「英雄からスーパーヒーローへ——十九世紀以降の英米における「神話」利用」232-48頁）。

〔その他〕

市民公開講座

1. 清川祥恵、『現代』を生きるアーサー王伝説」、佛教大学四条センター公開講座「魅惑の神話・伝承学の世界」、佛教大学四条センター（京都市・日本）、2017年1月17日。

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。